●昭和23年7月8日第3種郵便物認可●毎週2回月・木曜日発行(但し祝日を除く)●発行所〒104-8178 東京都中央区銀座5丁目15番8号 時事通信社 電話(03)6800-1111 ©時事通信社 2008

時事通信社

# 金融財政

2007年(平成19年) 10月11日 (木) 第9866号 (購読料金 月額税込み5,565円)

## アベサンのこと

お茶の水女子大学教授 篠塚英子

激動の暑い9月が走り抜けていった。話題の書、上杉隆氏の「官邸崩壊」(新潮社、8月発売)を読み終えた直後、同時進行で、安倍官邸の崩壊が現実となった。絶妙なタイミングでの出版。サブタイトルの「安倍政権迷走の一年」は、ジャーナリスト上杉氏の勘のよさの証明である。日本中を一周した政治的衝撃。しかし、2週間もの政治空白後、福田新内閣がスタートしても、国民には何やらシラケ気分と、倦怠感が漂っているように見える。

安倍後遺症であろうか。危機管理意識ゼロの政治機構に、不信感も抱かず信頼を置いてきた私たちのノーテンキさが情けない。

9月は台風シーズンである。大地震など自然災害がいつ発生してもおかしくない日本である。首相代行も置かず、入院してしまうなどもってのほかだ。組織のトップによる意思決定の空白は、許されない。企業人(大学人でさえも)でも、危機に際しての代行順位が取締役会議決などで規定されている。官邸側近の人たちが傍観していたわけではなかろうが、それが機能していなかったのは事実だ。これこそ、官邸内のネットワークがうまくいっていなかったことの証左であろう。

安倍退陣には山ほど批判が上がっている。私が一番強く心に響いたのは、朝日新聞「声」欄に載った投書である。それは、毎日障害児の介助をしている一人の母親の痛切な悲鳴であった。

「『やーめた』ですむ首相がうらやましい。私たちは、どんなにつらくても逃げられないし、後任はいないのです。終わりの見えない介護に途方にくれることもしばしばです」

福田康夫新首相は、政治家にとって最も大事なことは、と質問されて、進退の時期、特に辞める時期と答えていた。教育改革に熱意を燃やした安倍さんは、残念なことに子どもたちに最悪のお手本を見せてしまったようだ。今や、都合が悪くなると努力せずに勝手に放棄することを「アベサンになる」というらしい。

私たちの暮らしは、好むと好まざるとにかかわらず、政治から逃れられない。どんなに不愉快でも「アベサン」になってはいけないのだ。

CONTENTS

●解説 サービス複雑化と経営効率化の両立を目指して(関戸亮司)
—金融サービスのIndustrializationの展望と課題…… 2
●BANCO
史上空前のバブルの予感(金子太郎)…… 3
●照一隅
サブプライムと政策割り当て(泰久)…… 5
●インサイド 「KY」のススメ(博者青松)… 8
●政経深層
地価の下落が始まった(岡 憲策)…… 9
●インタビュー 金融庁幹部に聞く〈下〉
—畑中龍太郎検査局長……10
●あと・らんだむ (神崎倫一)……11
●マーケットレーダー
「サブプライム」後の世界(真壁昭夫)……14
●翔んでけスポーツ (谷口源太郎)……15
●連載小説⑨ 炎の森 (砂原和雄)……16
●北風・南風 西日本シティ銀行(福岡)……20